

ニュースレター

2019年7月

会員の皆様へ

一般社団法人 日本看護研究学会九州・沖縄地方会会長 楠葉 洋子

令和元年を迎え、会員の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。

会員の皆様の中には、昭和に生まれ、平成、令和へと看護の道を歩まれてこられた方がたくさんおられるのではないかと思います。私は、日頃、明治・大正・昭和という激動の時代を生きて、生き抜いてきた方々に畏敬の念を感じる事が多々ありましたが、自分自身が3つの時代を生きていくことになると思うと感慨深いものがあります。

振り返ってみますと、私が看護師として病院に就職した時は、パソコン・インターネットも知らず、記録は全て手書きの時代でした。採血や尿器交換も素手で行っていました。現在では考えられないようなことをしていたように記憶しています。平成に入り、パソコン・インターネット時代の到来、医療安全へ向けた意識の強化、看護学教育の大学化の加速、高度医療とともに認定看護師・専門看護師、医療倫理、研究倫理など医療・看護の質の担保を目指した取り組みなどが始まりました。まさに平成は医療に関わる様々なテクノロジーの進化等に伴う「変革」の時代であったように思います。今般の看護師指定規則改正へ向けた検討の背景のひとつにも、「少子高齢化、疾病構造の変化に応じた適切な医療提供体制への整備の必要性、IoT (Internet of Thing) 等の ICT (Information and Communication Technology : 情報伝達技術) 導入の加速化」があるように、令和の時代へ継続・発展していくことは必至です。

このような状況のなか、私は本年3月末日をもって定年退職いたしました。4月からは、もう少しだけ看護学教育に携わりたいという気持ちがあり、福岡の地で再び仕事をさせていただいています。平成から継続されている「変革」についていけるか一抹の不安を抱えながら……。

さて、本題の日本看護研究学会九州・沖縄地方会について、本年度からニュースレターの配信を紙媒体の郵送からWEB上でのデータ配信のみとさせていただきました。印刷や郵送にかかる費用が値上がりしており、本会から地方会に割り当てられる予算では賄えない状況になっていることが第一の理由です。紙媒体の良さも十分承知のうえでの今般の変更になりましたことをご了承いただきたく、宜しく願い申し上げます。

最後に、ニュースレターを眺めると、例年若い人の執筆が少ないように思われます。これから担っていく若手からの情報発信も進めていく必要があるのではないかと考え、2名の若手会員に執筆を依頼しました。昨年度のニュースレターで述べました「最良のケアの探究」および「臨床(地)に根差した研究」にも繋げていけるような関わりや思いが述べられていることを期待しつつ……。



*** 事務局より ***

- ◆ 2019年4月1日より事務局が変更になりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。
- ◆ ニュースレターは紙媒体を廃止し、ホームページ上に掲載することになりました。いつでもホームページにアクセスし、ニュースレターがご覧いただけます。
- ◆ 超高齢化社会を迎え、地震などの災害もしばしば見受けられるこの頃ですが、地方会学術集会で皆様と情報共有し、意見交換することで、新しい時代での看護学や看護実践について考える機会になることを期待いたします。

● これからを担う若手会員からのメッセージ ●

これまでの5年間とこれからの5年間

大分大学医学部看護学科 岩本 祐一

令和という新しい時代を迎えた今年度、私は精神看護学の教員として6年目の年に入りました。ここまでの5年間は本当にあっという間であり、自分自身が期間に見合う成長を遂げることができたのだろうか、とまさに今この文章を書きながら自問自答しています。5年前の自分を思い返すと、働く環境が大きく変化し、教育という現場で右も左も分からないまま必死に過ごしていた日々が今でも鮮明に蘇ります。と同時に、その時には気づけていなかった周囲の様々なサポートがあったこと、そのことによって今の自分があることをつくづく実感しています。最近では、教育・研究などの業務をどのように両立していくのか、それらの質をどうすれば向上させていけるのかなど、いまだ試行錯誤の毎日ではありますが、実践して得られた結果を自分なりに分析し、次の実践に活かしてみようとするのが徐々にでき始めたことで、教員として充実した日々を過ごせるようになりました。自分で口にするのは憚られますが、これらの変化が私なりの5年間の成長だったのではないかと自分自身に言い聞かせています。

5年前の自分では、物事を俯瞰できず、5年後の自分、つまり現在の自分を想像することができませんでした。これからの5年という時間をどのように創っていくのか、今ならそれなりのビジョンを描ける気がしています。そして、それは今の私には必要なこととも考えます。まだまだ「若手」と呼ばれる立場ではありますが、それに甘んじることなく、「若手」という強みを最大限に活かしつつ、チャレンジングな機会を積極的に得ようとする姿勢を、今後5年間の基本スタンスにできればという思いです。

さて、令和元年11月9日(土)、大分の地で「事例報告から事例研究へ ～看護実践知の創造にむけて～」というテーマのもと、第24回九州・沖縄地方会学術集会在開催されます。当日は、私と同じようなたくさんの「若手」の方々にお越しいただき、これからの看護について共に語り合い、新しい次の一步を踏み出すための絶好の機会となることを楽しみにしています。このようなことを想像し、胸躍らせながら来る11月に向け準備を進めてまいります。

これまでの歩みを振り返り、さらなる飛躍に向けて

国際医療福祉大学福岡看護学部 森 雄太

私は臨床を経験後、看護専攻科の教員を経て、現在の大学で成人看護学の教員として4年目を迎えました。思い返すと毎日がとても慌ただしく、瞬きする間もなかったように感じます。また、日々変化する医療・看護の現状に置いて行かれないよう情報を蓄えながら、講義・臨地実習、看護研究を通し、少しずつ自分自身の成長を実感することができるようになったかと思えます。

そんな中、同じ教職員の立場にある方や臨床看護師の方と出会い、意見交換する機会に恵まれたことで、互いに刺激し合いながら、新たな発想につながっていることを感じています。このような人とのつながりや経験を積み重ねることで、さらなる看護研究・教育の研鑽につながると、楽しみも湧いてくるようになりました。また、多様性に富んだ職種であるということを再認識し、私自身が看護師の資格を社会にどう貢献することができるかという根底に振り返りながら、新たな発想を創る立場へと成長していきたいと思っています。

そして、若手だからこそ自由な議論、既存の体系や価値観に縛られない発想が、学問や社会の発展にとって力になるのではないかと考えています。先の問題を見据え、現在の問題や課題に対し、若手としてのフレッシュな知恵を出し合い、長期的展望を見据えることが大切なことではないかと思うのです。

教える立場になったことで新たな発見もたくさんありました。特に臨地実習を通し、看護学生がもつ新鮮な思考や対象のとらえ方にハッと思わされたこと、日々の看護実践の中で忘れかけていた看護の本質を考える機会を多く得たことがありました。同じ看護を志し未来を志向する一人の人として、支援することを大切にしながら関わっていきたいと考えています。私自身も学生と共に学び、悩みながら今後出会う対象者と向き合うことで、より一層看護を探求していきたいと思っています。

一般社団法人日本看護研究学会

第23回九州・沖縄地方会学術集会を終えて

学術集会長 楠葉 洋子

第23回日本看護研究学会九州・沖縄地方会学術集会を、平成30年11月3日に長崎大学医学部良順会館・ボンペ会館で開催いたしました。会員の皆さまをはじめとする多くの関係各位の皆さまのご支援のもと開催できましたことを心より感謝申し上げます。

長崎での開催は今回で3回目になります。3回目の学術集会は、「医療者は多くの場合、チームとして機能する」の観点から、「融合型研究～多職種連携の可能性」をメインテーマにいたしました。医療の現場で展開されている「異なる専門職者が同等の立場からそれぞれの専門性を発揮・協働する」というチームアプローチを研究に応用したいという思い・願いをこめてこのテーマにいたしました。お陰様で、166名の方々（学生ボランティアは含まず）に参加していただき充実した学術集会となりました。

午前中、まずプロローグとして、「地に育まれた長崎の魅力と看護」について私自身の経験も踏まえながら多職種連携に繋がっていくような流れでお話をさせていただきました。

特別講演では、「融合型研究に期待すること～その人らしい生活の再建を目指して」のテーマで松坂誠應先生（長崎リハビリテーション病院在宅支援リハビリテーションセンター）にご講演いただきました。講演の中で私が特に感動したのは、異なった職種間にある4つの問題（①専門教育による思考様式の違い、②専門性から生じる「こだわり」、③職種間にある誤った上下関係、④相互のコミュニケーション不足）のうち、特に①②を前向きに捉え話されたことです。各専門職

は異なった視点と思考を持ち「こだわり」があるからこそ専門家として患者・利用者に関わることができること、多職種協働で「多面的に評価」「異なった視点で評価」することが「その人らしさの醸成」に必要であるというお話は非常に説得力のあるものでした。

シンポジウムでは、「多職種の研究に学ぶ～連携の可能性」をテーマに、平瀬達哉先生（理学療法士）、吉崎尾優太先生（作業療法士）、徳永陽子先生（看護師）、齋藤俊行先生（歯科医師）にシンポジストとしてご登壇いただきました。懇親会では、シンポジウムでご講演いただいた先生方との交流会を開催いたしました。短い時間ではありましたが、融合型研究の必要性について考えるとともに、看護の研究や実践における多職種連携の可能性について探る機会になったものと思っています。

午後は、一般演題として口演15演題、示設20演題の発表があり、活発な意見交換がありました。修士課程の学生の発表はもちろんのこと、先輩看護師に交じって学部時代の卒業研究を発表する新人看護師もあり、学会デビューとして良い経験になったのではないかと思います。

最後になりましたが、本学術集会にご参加いただきました皆さま、ご広告やご寄付にご賛同いただき多大なご協力を賜りました医療機関、企業団体の皆さま、座長や査読をしていただきました皆さま、企画委員、実行委員、学生ボランティアの皆さま方に心より感謝とお礼を申し上げます。



一般社団法人 日本看護研究学会 第24回九州・沖縄地方会学術集会ご案内

メインテーマ 事例報告から事例研究へ ～看護実践知の創造にむけて～

日本看護研究学会 第24回九州・沖縄地方会
学術集会長 原田 千鶴

このたび日本看護研究学会 第24回九州・沖縄地方会学術集会を大分で開催することになりましたので、ご案内申し上げます。

この度のテーマは、看護職が日々取り組んでいる看護実践から看護の実践知の発見につなげる研究方法の一つである『事例研究』に注目しました。事例研究に取り組んでいる、あるいはこれから取り組んでみようと思う、研究・教育職の皆様、現場で実践に取り組んでいる看護職の皆様、研究方法を学んでいる学生の皆様それぞれの関心にお応えできることと思います。

会員の皆様をはじめ、多くの方々にご参加頂きますよう企画委員一同お待ち致しております。

- ◆日時：2019年11月9日(土) 9:00～16:00
- ◆会場：大分大学医学部 挾間キャンパス 看護学科棟
- ◆プログラム：
 - 9:00～ 開場・受付開始
 - 9:20～ 開会式
 - 9:30～10:30 特別講演「事例研究法の意義と可能性」
講師 内田 雅子先生(高知県立大学看護学部)
 - 10:40～12:00 シンポジウム「事例研究が看護現場を変える」
～看護実践者が取り組む事例研究の過程と課題～
シンポジスト 事例研究に取り組んだ経験のある看護実践者3名
 - 12:15～13:00 ランチョンセミナー(予定)
「大分が生んだ三人の偉大な医学者、水滴は岩をも穿つ」
講師 島田達生(大分大学名誉教授 大分医学技術専門学校 校長)
 - 13:10～13:40 総会
 - 13:50～16:00 一般演題(口演・示説)
 - 16:00 閉会
- ◆一般演題募集期間：2019年6月17日(月)～7月22日(月)
- ◆事前参加登録期間：2019年6月17日(月)～9月27日(金)
- ◆学会ホームページ：<http://www.med.oita-u.ac.jp/jnsr-kyuoki24/>
- ◆学術集会参加費



	事前参加申し込み	当日参加
会 員	3,500円	4,000円
非 会 員	4,000円	4,500円
学生・院生(抄録代含む)	2,000円	2,000円
午前プログラムのみ		2,000円

- ◆学術集会事務局：大分大学医学部看護学科内
〒879-5593 大分県由布市挾間町医大ケ丘1丁目1番 大分大学医学部看護学科内
Tel/Fax：097-586-5076 E-mail：jnsr-kyuoki24@oita-u.ac.jp